

既成概念を破るビジネスをつくろう

株式会社バベル 代表取締役社長 湯浅美代子氏

インターネットの急速な普及によってまた大きく夢を膨らますことができました。もう一度、今までの全体のシステムを見直そう。新しいインターネットをベースにした会社にして行こう。そのコンセプトが、Eバベルです。もちろん最初からEバベルができたわけではなく、94年から2年ほどいろいろな勉強をしました。通信制・通学制で紙をベースに教育を行っていたものを、インターネットに転換することを考えました。そうなるとなにも国内だけでなくグローバルに考えようということになりました。

一番の既成概念の壁がありました。わが社はEバベルへの転換を決意しましたが、別に失敗したわけではなかったのです。翻訳業界のナンバーワン企業として築き上げた成功事例があり、それをもとに社内のシステムができ、みな、社員たちは、そのシステムの考え方に適応しました。社会的なトップ企業なのだから、今までの路線を変えて妙なことをやってはいけないのではないか。社会的な評価も、提供するサービスのしくみも、しっかりと出来上がっていましたから、変えることをためらうのは自然なことかもしれません。お客様もバベルとはそういうものだと思っているので、お客様の価値観が社員の意識に反映します。

そこで気づいたのですが、私自身も含めて、社内のしくみ、社員こそが既成概念である。そう、自分こそが最大の既成概念であったのです。どうしようかと考えました。全ての行動の根源は何か？行動は価値観でできているので、まず意識の転換をはかる必要がありました。

20世紀の価値－既成概念－を変換して、21世紀の価値－新概念－を創造していく。しかし、20世紀の価値を全て捨ててしまうのではない。20世紀の価値の構造は、それぞれを分離してばらばらになっている。新しいものが出てくるとそれを捨ててしまいます。もちろん市場力があり、何でもできる企業はそれで良いのですが、私たちはそんな大企業ではありません。

様々な価値を統合させることによって新たな価値を創造しようと発想しました。実は、私たち住んでいる世界は翻訳の世界です。コトバによって活動するシステムというのが、人類の現代地球文明であり、それは情報構造として存在している。

これを変換するのは簡単だな。つまり、翻訳すればいいじゃないか。英語を日本語に、フランス語を日本語にという翻訳文法をつくってきたのですが、それらが生み出してくる背景としての構造にチャレンジしよう。意味、価値、システムのそのものの情報変換技術に研究に行こう。これをグローバル・ナレッジ・マネジメントと名づけました。（中略）

新事業展開においても既成概念の壁にぶつかりました。わが国は私企業が大学や大学院をつくることができません。学校法人にあらざれば学校にあらず、というのが日本です。が、それならばいいのよ、ということで、私たちの構想が実現できる場所を探したわけです。96年、米国にバベル・コーポレーション社を設立。そこからインターネットを使ってどうやって大学院の教育システムをつくれればいいのかということを研究しました。

また、どうすれば大学院が社会的に認知されるかも検討しました。グローバルに展開して、色々な国の人たちに認めていただかなければいけないからです。調べていくと米国にはACCREDITATION(大学・大学院教育の認証・格付け)という仕組みがあり、権威をもって機能していることを知りました。それを取得すれば世界的に認知されることがわかりました。それを取るにはどうすればいいのかを研究しました。

ハワイ州で、色々な方のお導きを得て、大学院を開設しました。ハワイ州にはそういうものを規制する法律がなかったのです。ハワイ州の商務省の長官、弁護士、バベル・コーポレーション社の堀田社長、アドバイザーの方、以上の4人で話し合い、新しい学校の枠組みを検討しました。そして2000年1月に開校することができました。世界で初めての翻訳の修士号を取得できる

インターネット大学院を誕生させたのです。